



■金継ぎ—リサイクルからアップサイクルへ—

「金継ぎ (きんつぎ)」という言葉をご存じでしょうか？

「金継ぎ」とは陶磁器の破損部分を、漆を用いて修繕・修復する日本古来の伝統工芸の一つです。接着剤の代わりに漆を用い、その漆に金粉を混ぜることによって修繕・修復後の接着面が金色に装飾されるものです。私にこの言葉を教えてくださったのは、本校警備員のHさんです。Hさんはよくレギュラーコーヒーを淹れてくださるのですが、コーヒーだけでなく陶磁器にもご造詣が深く様々な窯元のカップに淹れてくださいます。ある時、カップの持ち手に割れ目が入っているのを見つけて「金継ぎで直しますからしばらく代わりのカップにしますね。直すのには結構日にちがかかるんですよ。」と言われました。私にとっては初めて聞いた言葉だったので、「金継ぎ」の方法等について詳しく教えていただきました。気のせいかもしれませんが、その日以降メディア等でも「金継ぎ」という語によく接するようになりました。



2000年に公布された「循環型社会形成推進基本法」では、3R「リデュース (Reduce・発生抑制)・リユース (Reuse・再使用)・リサイクル (Recycle・再生利用)」の重要性が提言されました。「金継ぎ」は一見リユースに該当されるように感じます。しかし、製品の壊れた部分を魅力的に修繕・修復して再利用できるようにする「金継ぎ」は、単なるリユースではなく新たな価値を与えて再生すること、つまり“クリエイティブ・リユース (創造的再利用)”と言えます。もちろん、一度資源に戻して製品をつくり直すリサイクルとも異なります。似たような言葉にリメイクもありますが、“より価値を高めた再利用”が重視されている点において異なっています。このように「金継ぎ」は製品自体に付加価値を与えているため“アップサイクル”と表現されることもあります。そして「金継ぎ」は、持続可能な社会の実現を目指す世界共通の目標であるSDGsの17ゴールのうち、ゴール12「つくる責任 つかう責任—すべての人の意識と行動をシフト」にも好事例として取り上げられています。



壊れてしまった箇所を、修繕・修復することによって以前よりも価値のあるものにしていくという“金継ぎ的”考え方は、どこか筋肉トレーニング (筋トレ) にも通じるところがあると思ったりもします。負荷によりダメージを与えられた筋繊維は、プロテイン等に含まれるたんぱく質やアミノ酸の摂取により修復され、以前より強固な筋肉になっていきます。もっとも、修復された筋繊維自体は外から見えないので「金継ぎ」とは少々ニュアンスが異なるかもしれませんが…。筋トレは、意図的に筋繊維を壊してより強固な筋肉をつくりあげようとするのですが、私たちの日常生活全般に目を向けると、予期しない悩みや思わぬ失敗などにより傷ついてしまうという

ことも数多くありますよね。長い人生、生きていけば大なり小なり失敗することがあります。そのような時、この“金継ぎ的”思考を取り入れてみてはどうでしょう。「失敗に向き合いながら修復・修繕を続けていくことで次回の成功につなげ、逆に自分のストロングポイントに変えてしまう」といったことです。外面的なことばかりではありません。目には見えない部分にもあてはまります。共通するのは、壊れたものを全否定せず肯定しながらより価値のあるものにバージョンアップしていこうという思考です。

今ある自分を肯定しながら、より価値のある自分にゆっくりじっくりバージョンアップしていけばいいですね。「金継ぎ」は、長い期間を費やしながらいふ作業です。

慌てない慌てない。それが何より大事です。